

情報リテラシーを育てよう

まるもと いくこ
丸本 郁子

中国の古い格言にこのようなものがある。「人に魚を与えれば、その時は満たされるが、すぐまた空腹になる。しかし、魚の捕り方を教えれば、その人は一生飢えることがない」。まさに学びの原点をつく言葉だ。今日の社会における「魚の捕り方」の一つに「情報リテラシー」がある。これは情報活用能力とも言われ、必要な情報を主体的に収集・選択・創造し、状況に合わせて発信できる能力を指す。女性のキャリア形成に欠くことのできない力だ。しかし残念ながら、過去の日本の学校教育は魚（知識）を生徒に与える（詰め込む）ことには熱心であったが、魚の捕り方（学び方の技術）を育ててはこなかった。したがって卒業後、急激に変化する社会に放り出された私たちは、時に途方にくれ、また押し寄せる情報につい流されてしまっていた。

まず適切な判断を下し行動を起こすには、正確な情報が必要であると認識しよう。さまざまな情報源の存在を知り、メディアに応じた情報探索の手法を身につけよう。情報を批判的に評価できるようになろう。集めた情報を論理的・効果的に組み立てられるようになろう。自分の言いたいことを状況に合わせて効果的に伝えられるようになろう。そして社会に主体的にかかわっていこう。では、どうやって？

学校教育現場でも過去の反省を踏まえ、情報活用能力の育成に取りかかっている。実は、この人々への情報リテラシー獲得支援という考えは別に目新しい概念ではない。図書館では利用者教育と称して、決して主流ではなかったが、さまざまな講座を組み、ガイドブックやビデオ作成などそのノウハウを蓄積してきている。これからの女性の学びを組み立てる時に、そのノウハウを活用しない手はないだろう。

■プロフィール 1935年生まれ。大阪女学院短期大学名誉教授。日本図書館協会の利用教育委員として「図書館利用教育ガイドライン」や「図書館利用教育ハンドブック」、またビデオ作成等に加わってきた。現在は、大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）実行委員会が受託した文部科学省委託「女性のキャリア形成のための情報リテラシー獲得支援事業 学習支援者養成プログラム開発」に委員としてかかわっている。